いじめと非行の関係性

新井　萌奈

1　はじめに

2　いじめと非行少年の定義

3　いじめと非行の背景-同質的側面

4　いじめと非行少年の交友関係

5　おわりに

1　はじめに

いじめと非行を比較した際、少年の逸脱化という点では一緒である。しかし、その重大さには認識の差がある。実際に、旭川女児凍死事件では、被害者が亡くなっているにも関わらず、加害者は罪に問われていない。いじめは、非行よりも軽視されているように思う。

いじめの件数は年々増加しており、2022 年度に認知されたいじめの件数は 68 万 1948 件[1]であった。また、深刻ないじめの重大事態も 217 件増え、最多の 932 件であった。加えて、4 年前の令和 2 年度に行われた、文部科学省が不登校になった小中学生に「学校に行きづらいと感じたきっかけ」を聞いた調査では、「嫌がらせやいじめがあった」という回答は、小学生が 25.2%、中学生が 25.5%であった。[2]ここから、不登校になる一つのきっかけとしていじめがあると考えた。そして、いじめられて学校に居場所がなくなり、学校に行けなくなる、学校以外での居場所を探し町にでることで非行に走るのではないかと考えた。

---

[1] 文部科学省初等中等教育児童生徒課（令和 5 年 10 月 4 日）「令和 4 年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について（mext.go.jp）（2024 年 1 月 18 日）

[2] 文部科学省（令和 3 年 10 月 13 日）「令和 2 年度　生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」R2 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要（mext.go.jp）（2024 年 1 月 18 日）

以上から、本稿では、いじめと非行には関係性があるのかについて探ってみることにしたい。

2　いじめと非行少年の定義

文部科学省は、

「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通射て行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となって児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」[3]

とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。（文部科学省　いじめの定義）
としており、「いじめ」の中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められるものもある。対して、非行少年とは、20 歳に未満で、家庭裁判所の審判に付される少年のことを指す[4]。ここから、いじめと少年非行は心理的または物理的な影響を相手に与えるという社会的逸脱行為という点で同質のものだと捉えることができる。

3　いじめと非行の背景―同質的側面

（1）いじめの精神的特徴

昨今、深刻化・複雑化するいじめについて、いじめの被害者と加害者の精神的な特徴を見ていく。伊藤（2017）[5]が行った、小学生、中学生、高校生に対していじめの被害・加害経験を尋ねた結果で、いじめの加害役割と被害役割は固定しているものではないことが明らかになった。さらに、いじめをした子どもの多くは、過去にいじめられた経験を有しており、両者を経験している生徒が 50%近くを占めることが分かった。ここから、役割は流動的であるといえる。

---

[3] 文部科学省「いじめの定義の変遷」いじめの定義の変遷（mext.go.jp）（2024 年 1 月 18 日）
[4] 検察庁「少年事件について」少年事件について：検察庁（kensatsu.go.jp）（2024 年 1 月 18 日）
[5] 伊藤美奈子「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎研究」65_26.pdf (jst.go.jp)（2024 年 1 月 18 日）

いじめを受けた子どもたちは、大きな心身ストレスを抱えるとされている。岡安・高山（2000）によると、「いじめ被害者はストレス症状のレベルが高く、高いレベルにある抑うつや不安は、長期化し重篤化すると不登校や心身疾患、自殺に結びつく可能性が高い」と示唆している。また、黒川（2010）でも、「全般的いじめ被害者群は、不機嫌・怒りの感情、抑うつ・不安感情、無気力的認知・思考が高い」ことが明らかにされている。

いじめと自尊感情の関係では、Cam-mack-Barry(2005)によると、「いじめ被害者は、いじめ被害経験のないものに比べて、被害感や不安だけではなく自尊感情の低下がみられる」と報告している。他方で、本間（2003）によるいじめ加害と自尊感情の研究では、「いじめ加害のみ群は自尊感情が高く、被害・加害とに経験した両経験群は低い」という結果が報告されている。これらのことから、いじめに関わる生徒の自尊感情は関わっていない（傍観者）と比べて低いのではないかと考えることができる。

伊藤（2017）の調査[6]の結果、低年齢であればあるほど、いじめの経験は自尊感情の低さや情緒不安定、後ろ向きな生き方に結びつき、その傾向は加害経験があるとより顕著になる。さらに、加害経験がある生徒は、人間関係のなかでの自尊感情が低いため、理解者の存在や人間関係の中でなんらかの困難を抱えているものが多いといえる。

これらのことから、自尊感情が低く人間関係で困難を抱えている子どもたちがいじめに関係すると考えることができる。

（2）非行少年の精神的特徴

非行少年は、劣等感を持ち、情緒が不安定で自己統制ができないとされている。橋本（2006）[7]は、非行の特徴として、いくつか特徴をあげているのだが、ここでは、漠然とした不安があることを取り上げる。思春期にいるものは、子どもから大人への移行期を乗り越えるため、悩みや不安を抱えているが、最近の少年は漠然とした悩みを持っているとしている。実際にいじめられた経験がなくても，いじめられるのではないかという不安を抱えやすく、 いつ自分がいじめても，逆にいじめられてもおかしくない，被害と加害の境界が曖昧な感覚を持っていると言える。加えて、通常は誰しも心の中に重要な存在がおり、目の前にその人がいなくても自分を支えてり、叱ってくれる。しかし、非行少年の中には、そのような対象が存在しておらず、存在していても未熟な関係になっている。ここから、上手く人間関係を築

---

[6] 伊藤美奈子「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎研究」65_26.pdf (jst.go.jp)（2024 年 1 月 18 日）

[7] 橋本和明（大阪家庭裁判所）「最近の非行の特徴と少年の心」0171-0173.pdf (med-all.net)（2024 年 1 月 18 日）

くことができていないあるいは、築く機会が少なかったといえる。

ボンド理論を提唱したハーシー(1969-1995)は、ボンド理論の中で、「愛着(attachment)」「投資（commitment)」「巻き込み（involvement)」「規範観念（belief)」の４つをボンド理論を構成する要素としてあげている。この社会的ボンドのいずれかが弱まることによって、少年犯罪や非行が起こりやすくなると主張している。

規範と非行に関して、廣井（2014）は、非行少年だけではなく、彼等を取り巻く社会の「悪」に対する嫌悪感を包容力の欠如を指摘している。そして、非行少年の更生において、人と人との関係の中で「悪」の意味を知ることで、「悪い行為」を自ら制御しつつ、社会の成員として地位と役割を獲得するようになると指摘している。また、内山（2012）は、非行少年の規範意識情勢の背景として、日常的な生活習慣と保護者との関わりの中で、父親の存在感の欠如を調査結果として明らかにしている。[8]ここから、規範感覚は、当たり前の生活を送ることが生活感覚としての規範遵守につながることで形成されることが分かる。

非行少年において、精神の未熟さが問題として挙げられ、その原因の根本に家庭環境の問題があるのではないかと推測できる。

（3）家庭環境の同質性

いじめ発生における加害者の環境的要因として、大嶋（2015）の調査[9]によると、「公の場でのいじめ」を行ういじめ加害者は、親の養育態度の偏りがみられない家庭で育っており、「陰でのいじめ」を行ういじめ加害者は、子どもに対して親方の関心が高いか低いかの二極性があることが分かった。ここから、親からの過干渉、無関心どちらも子どもの精神的発育に影響を与えていることが分かる。

非行少年の環境的要因は、２つの典型的パターンに分けられる。[10]１つ目は、過剰抑圧型である。これは、外見上は問題がない家庭でも、親の養育が厳しすぎると、子どもは自分欲求を強く抑制してしまうことをさす。この抑圧によって、小さな非行を引きおこしたり、突

---

[8] 作田誠一郎「非行の要因からみる少年非行の現状と規範意識」po (bukkyo-u.ac.jp)（2024 年 1 月 18 日）

[9] 大嶋千尋（2015）「いじめ発生における加害者の環境的要因及び心理的要因についての実証的研究」いじめ発生における加害者の環境的要因及び心理的要因についての実証的研究（jst.go.jp）（2024 年 1 月 18 日）

[10] 新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部「非行少年の心理　非行は心の SOS・心の叫びを聞こう」非行少年の心理（心理学総合案内こころの散歩道）（n-seiryo.ac.jp）（2024 年 1 月 18 日）

然重大事件を引き起こすこともある。2つ目は、問題の多い家庭の中で、親に拒否、放任、虐待されて育つことで、攻撃的で不信感が強く、温かな人間関係を持つことができないことによって非行を繰り返すパターンである。これらのことから、非行も、いじめと同様に親からの過干渉、無関心が影響を与えていることが分かる。また、非行少年と家族の関係として、親からの愛情を十分に受けなかった、父性的しつけをうけて育ってきていない、あるいは、本気で叱られてこなかったことなどから愛されていないと感じることも要因として挙げられる。

いじめの加害者、非行少年ともに親と子との関係という共通の家庭の問題があることが分かる。

4　いじめと非行少年の交友関係

(1) いじめによる交友関係の変化

山口・長野（平成 24 年）の研究[11]では、過去にいじめられた経験により、「傷つけられることの回避」を念頭においた友人関係を築くことが分かった。また、友人の目を気にしてしまい本音での付き合いを避けるような付き合い方をしがちなのではないかと推測される。したがって、自分が傷つく、そして相手を傷つけてしまうリスクから、いじめの被害者を体験しているものにおいては、いじめを受けたことで友人との距離が生じ、希薄化する傾向にあるのではないかと推察される。

いじめられたり、いじめられたりすることで学校でも居場所がなくなり、交友関係が変化し、外での交友関係を求めることによって非行に走るのではないかという仮説を立てていたが、いじめられた当時の友人関係の変化を述べている論文がなかった。

(2) 非行少年の交友関係

非行少年の友人関係について、少年非行を特集した平成 17 年度版犯罪白書は、少年鑑別所に入所した非行少年に対して行われた意識調査の結果等から、「非行少年の方が一般青年よりも友人関係に対する満足度が低い傾向にある」と指摘している。新堂・松尾・中江・坂元 (2007) の調査結果[12]によると、自尊心が低い少年は、新たな交友関係を築く自信がなく、

---

[11] 山口由加・長野恵子（平成 24 年 11 月 12 日）「過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響」43-06.pdf (nisikyu-u.ac.jp)（22024 年 1 月 18 日）

[12] 新堂研一・松尾由美・中江美華・坂元章（2007）「非行少年の選択的友人関係志向に関連する心理特性とは？」ja (jst.go.jp)（2024 年 1 月 18 日）

同じようなタイプの少年と一緒にいる傾向が見られた。結果として、周囲から逸脱集団とみなされることも多く、それがますます自尊心を低めるという悪循環を形成している事例がある。一方、自尊心の高い少年では、様々な集団に関わったり、人によって態度を変えたりすることで、友人関係の深まりが得られにくく、非行に至っている事例が見出された。

5　おわりに

いじめの加害者や被害者になった子どもと、非行少年の環境的要因には共通点が多いことから、いじめの加害者・被害者ともに、非行に走る可能性があるのではないかと推測することができる。しかし、いじめたりいじめられたりすることが原因で交友関係が変化したという論文がなく、いじめが原因となり交友関係が変化し、非行に走るという関係性を立証することができなかった。また、非行に走るトリガーとしては様々なことが考えられ、データも十分でないことから、一概にいじめと非行は関係していると言い切ることはできない。今後は、いじめによりどのように交友関係が変化するのか、という部分に焦点を当て調べる必要がある。